

## 令和7年度 フランス国立パリ聾学校 (INJS) との交流

榎戸 里佳・澤口 真弓・水野尾 哲也・宮本 安希子・鎌田 ルリ子・久川 浩太郎

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、平成15年にフランス国立パリ聾学校 (Institut National de Jeunes Sourds de Paris) と姉妹校協定を締結して以来、相互訪問による交流を重ねてきた。アンケート調査から、生徒は英語、ジェスチャー、日仏翻訳、手話など様々なコミュニケーション手段を活用して意思疎通を図り、手話学習の必要性やコミュニケーションの難しさを感じながらも、外国語や外国の手話、ジェスチャーなどを用いたコミュニケーションへの前向きな態度が示された。

キー・ワード：国際交流 対面交流 コミュニケーション 異文化理解 外国語学習

### 1 はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、本校）とフランス国立パリ聾学校 (Institut National de Jeunes Sourds de Paris：以下、パリ聾学校) との交流は、平成15年の姉妹校締結に始まり、平成25年度からは相互訪問交流を実施している。令和2年度から4年度は新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン交流のみを実施していたが、令和5年度からは本校にパリ聾学校の生徒と教員を招き、対面交流を再開している。令和6年度は本校から生徒と教員がパリ聾学校に訪問し、体育やグラフィックの授業への参加と文化施設の観光を行った。アンケート調査の結果から、訪問交流を通して、外国の手話や文化に興味を示し、双方の意見や考え方の違いを尊重しながらコミュニケーションをとりたいという記述がみられた。

本稿では、令和7年5月23日に実施した本校高等部普通科での対面交流と12月に2回実施したオンライン交流の実践をまとめ、生徒が国際交流を通して学んだことや工夫点、改善点などに関するアンケート調査の結果について報告する。

### 2 対面交流

#### (1) 実施の手続き

パリ聾学校の生徒6名、教員2名、校長1名の本校への訪問決定後、事前に管理職や国際交流担当の教員で、交流の実施方法や高等部普通科訪問の流れについて協議を行った。当日の日程は表のとおりである (Table 1)。前年度のパリ聾学校訪

問交流に参加できたのは生徒10名のみであったため、本校での対面交流は普通科の生徒全員を対象として行うことにした。パリ聾学校の生徒6名に対し、本校生徒の人数のバランスがとれるように、学年ごとに交流内容を企画した。また、日本の学校生活を体験してもらうため、昼食時には教室で本校生徒とともにお弁当を食べた。パリ聾学校側からの要望もあり、清掃活動にも参加してもらうことにした。放課後は、軟式野球部での部活動体験、寄宿舎での舎生との会食を計画した。

Table 1 当日のパリ聾学校生徒の日程

時間	内容
9:15	学校着
9:20-9:40	挨拶
9:40-10:30	高等部普通科1年生との交流
10:30-12:30	高等部普通科3年生との交流
12:30-13:10	高等部普通科2年生との昼食
13:20-15:10	高等部普通科2年生との交流
15:10-15:25	清掃活動
15:25-15:45	休憩・更衣
15:45-17:15	部活動体験 (軟式野球部)
17:15-17:45	更衣
17:45-19:00	夕食 (寄宿舎)

#### (2) 対面交流の実施

##### ① 高等部普通科1年生との交流

1年生はパリ聾学校の生徒と本校の生徒との混合チームを6チームづくり、チーム対抗で「相撲」や「さくら」、「着物」など日本文化をテーマにしたジェスチャーゲームや日本の手話クイズなどのレクリエーションを行った。勝者には折り紙で作ったメダルが贈呈された。本活動を通して、パリ聾学校の生徒は日本の手話表現に関心を示す

## 46 令和7年度 フランス国立パリ聾学校 (INJS) との交流

様子がみられた。和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができた。

また、事前準備では、本校とパリ聾学校間の共通のコミュニケーション手段となる英語での説明文をグループごとに工夫しながら考えた。中学部までに学んだ英語の知識を生かし、本番でのスムーズなやり取りにつなげていた。通常の授業とはまた異なる達成感を味わうことができた様子がみられた。

### ② 高等部普通科2年生との交流

2年生の教室で昼食交流を行った。各学級にパリ聾学校の生徒が2名入り、会話を楽しみながら昼食をとる様子がみられた。

2年生は、体育館で体を動かしながら交流できる活動を考えた。各学級に2名ずつパリ聾学校の生徒が入り、3クラス対抗でドッジボールや風船バレーを行った。

また、清掃活動では、2年生の生徒に混じって、教室の黒板のチョークを集めたり、ほうきで床の掃き掃除をしたり、雑巾で椅子を拭いたりする体験を行った。パリ聾学校では生徒が教室の掃除をする習慣はないようであったが、一生懸命に取り組んでいた。

### ③ 高等部普通科3年生との交流

3年生は、日本文化体験とジェスチャーゲームの2つのグループに分かれて交流を実施した。

日本文化のグループでは、百人一首、お手玉、けん玉、福笑い、折り紙などの日本の伝統的な遊びに加え、書道や将棋、箸で豆を運ぶなどの体験を行った。それぞれの活動でタブレットに英語の説明を表示したり、見本を見せたりしていた。

ジェスチャーゲームのグループでは、パリ聾学校の生徒と教員を含めた日仏混合チームをつくり、自由にお題を決めて行った。日本やフランスにまつわるものだけでなく、『ハリー・ポッター』の有名なシーンのジェスチャーを行うなど、双方の生徒に伝わるようなお題を考えたり、伝わるように身振りやジェスチャーを工夫したりしていた。チームで意見を出し合い、ホワイトボードに答えを書いて解答していた。

### ④ 各学年との交流後

高等部普通科での交流終了後、本校グラウンドで軟式野球部の部活動体験を行った。軟式野球部の部員や顧問が中心となり、まずは準備運動を行い、キャッチボールやバッティング練習を楽しむなど、スポーツを通じた交流をした。パリ聾学校の生徒は野球の経験がなかったが、本校軟式野球部の部員がバットの構え方をレクチャーし、ヒットを打つ生徒もいた。

部活動体験後、寄宿舎で生活する生徒たちとともに夕食をとった。昨年度にパリ聾学校を訪問した生徒を中心に、言語や文化を超えた交流が自然に生まれ、笑顔あふれるひとときとなった。

## 3 アンケート調査結果

対面交流でパリ聾学校の生徒と深く関わった2・3年生に共通の質問項目を含めたアンケート調査を実施した。3年生21名、2年生12名から回答を得た。KJ法を用いて、2・3年生の回答を合わせてグループを抽出した。1つの回答に2つ以上の要素が含まれる場合には、要素ごとに分けてグルーピングを行った。グループと件数を以下に示す (Table 2~6)。

交流で楽しかったことや嬉しかったことについての質問には、「コミュニケーション」に関する記述が24件あり、そのうち「意思疎通の喜び」11件、「ジェスチャー」7件、「手話」6件、「活動」に関する記述が6件あり、そのうち「運動」4件、「日本文化」2件、その他5件であった (Table 2)。

Table 2 楽しかったことや嬉しかったこと

	グループ	件数
コミュニケーション	意思疎通の喜び	11
	ジェスチャー	7
	手話	6
活動	運動	4
	日本文化	2
その他		5

交流を通して学んだことや考えが変わったことについての質問には、「コミュニケーション」に関する記述が21件であった。そのうち「相手の言語

がわからなくても、なんとか会話することができる」というような「コミュニケーションへの楽観的見方」に関する記述が8件と最多であった。そのほか「コミュニケーションの楽しさ」「伝える思いや努力の大切さ」「コミュニケーションの難しさ」についての記述が2件ずつであった。また、手話に関する記述も7件あり、「国際手話、アメリカ手話、フランス手話など手話への学習意欲」に関する記述が5件、「表現に関する気づき」が2件であった。そのほか「パリ聾学校の生徒への気づき」が5件あり、「会話や活動を通しての気づき」3件、「コミュニケーションの気づき」2件であった (Table 3)。

Table 3 学んだこと

	グループ	件数
コミュニケーション	楽観的見方	8
	楽しさ	2
	伝える思いや努力の大切さ	2
	難しさ	2
	手話 学習意欲	5
	表現に関する気づき	2
パリ聾学校生徒への気づき	会話や活動を通しての気づき	3
	コミュニケーションの気づき	2

交流で工夫したことについての質問には、「コミュニケーション」に関する記述が29件あった。そのうち「ジェスチャー」12件、「翻訳機能の活用」8件、「手話」7件、「英語での筆談」2件であった。「活動」に関する記述は14件あり、そのうち「英語やフランス語での説明表示」8件、「写真・動画の提示」「活動内容」が3件ずつ、その他3件であった (Table 4)。

Table 4 工夫点

	グループ	件数
コミュニケーション	ジェスチャー	12
	翻訳機能の活用	8
	手話	7
	英語での筆談	2
活動	英語等での説明表示	8
	写真・動画の提示	3
	活動内容	3
その他		3

交流の改善点についての質問には、「活動」に関

する記述が16件、そのうち「事前準備」7件、「活動内容」5件、「説明方法」4件であった。「コミュニケーション」に関する記述は14件あり、そのうち「手話学習の必要性」6件、「コミュニケーションの準備」「コミュニケーションへの姿勢」に関する記述が4件であった (Table 5)。

Table 5 改善点

	グループ	件数
活動	事前準備	7
	活動内容	5
	説明方法	4
コミュニケーション	手話学習の必要性	6
	準備	4
	姿勢	4

今後国際交流で取り組んでみたいことについての質問には、「コミュニケーション」に関する記述が20件、そのうち「手話」7件、「英語等の活用」「コミュニケーションへの意欲」5件、「コミュニケーションの準備」2件、「ジェスチャー」1件であった。「活動内容」に関する記述は7件あり、そのうち「運動」「遊び」が3件、「外出」1件であった (Table 6)。

Table 6 今後取り組みたいこと

	グループ	件数
コミュニケーション	手話	7
	英語等の活用	5
	意欲	5
	準備	2
	ジェスチャー	1
活動	運動	3
	遊び	3
	外出	1

#### 4 オンライン交流

##### (1) 実施の手続き

本校高等部普通科の交流担当者がパリ聾学校の教員とメールで連絡を取り合い、時差を考慮し、実施日時や方法、内容等を検討した上で、12月12日、19日の放課後に実施した。

日本とフランスでは8時間の時差があるため、日本時間の16時30分(部活動の時間に相当)、フランス時間の8時30分(1時間目の時間に相当)に開始し、1時間程度交流を行うことにした。ま

た、本年度は夏季デフリンピック競技大会東京2025があり、パリ聾学校の生徒は11月に東京にデフリンピック観戦に来ていたので、12月にオンライン交流の実施となった。オンライン交流では多人数でのやり取りが難しくなることや、放課後の活動であること、また3年生は進路実現に向けた学習の優先度が高まる時期であることなどを考慮し、交流の参加は希望制とした。

12月8日に事前指導を行い、5名が参加することとなった。事前指導の際は、パリ聾学校から送られてきたフランスの学校についての PowerPoint の資料の内容を生徒と確認し、生徒に紹介したい内容について話し合い活動をさせた。「日本の学校紹介」、「日本の学校行事」、「時間割」、「通常の学校と本校との違い」、「日本の手話」をテーマに話すことになった。「日本の学校紹介」では、幼稚園、小学校、中学校、高校の教育対象年齢と履修科目について紹介することにした。

## (2) オンライン交流の実施

### ①機材や教室内配置

オンライン交流は、3年3組の教室を会場とし、テレビモニターを使用して行った。前年度まで使用していた Web 会議システム Zoom は 40 分の時間制限があるため、本年度は Microsoft Teams の会議機能を使用した。

発表者の撮影は、タブレットを使用し、本校のノート PC をテレビモニターに接続し、パリ聾学校の様子と本校の生徒の様子、発表用のスライドを提示した (Fig. 1)。スライド提示は、Microsoft Teams の会議の画面共有機能を用いた。本年度の参加者は5名と少なかったため、なるべく設定を簡潔にし、発表者や交流担当教員の機材準備の負担を減らすようにした。本校生徒の中に1名デジタルワイヤレス補聴援助システム「ロジャー」を使用している生徒がいたので、テレビモニターの近くに「ロジャー」のマイクを置き、パリ聾学校の生徒の声を聞き取りやすくした。本校の教員が説明をする際は教員が装用した。

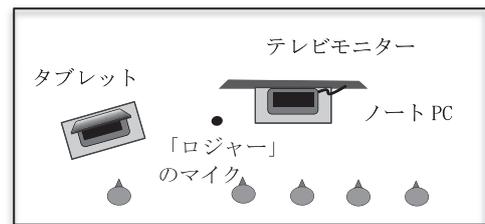


Fig. 1 教室内の配置

### ②交流の内容

12月12日は主にパリ聾学校の生徒がフランスの教育とパリ聾学校の教育に関するプレゼンテーション発表、12月19日は本校の生徒が日本の学校等についてプレゼンテーション発表を行うことにした。パリ聾学校の授業は8時30分から始まるため、本校生徒は16時に教室に集合し、プレゼンテーションの見直し、発音の確認、フランス語の簡単な挨拶、フランス手話の挨拶表現を確認した。

12月12日は、画面共有機能で資料を共有し、パリ聾学校の生徒の発表を聞いた。発表後、本校生徒は“What do you usually do after school?”

“What events are there at the school?”とホワイトボードに書き、質問すると“We do homework.” “We have the Abbe de L’Epee Celebration.”とパリ聾学校の生徒が紙にペンで書いて答えた。その後本校生徒が“Que ls plats me recommendez-vous?”とフランス語で質問すると、パリ聾学校の生徒は好きな食べ物をそれぞれのスマートフォンの画面に映して示した。本校生徒は質疑応答をする際に英語で書き、その後インターネットでフランス語翻訳機能を使用してフランス語で質問をするようになった。

12月19日は本校の生徒が「日本の学校紹介」、「日本の学校行事」、「時間割」、「通常の学校と本校との違い」、「日本の手話」について発表をした。パリ聾学校からは“What is the independent activity?”と特別支援学校の自立活動について質問があった。本校の生徒は自立活動について英語で説明し、“Do you have similar studies?”と質問すると、パリ聾学校からは“Yes.”と回答があった。話題がクリスマスになり、本校生徒から“Do you like Christmas songs?”と質問すると、

パリ聾学校の教員から“Boys don't like Christmas songs.”と返答があり、本校生徒は「なんで？」と日本語で言いながら、“Why?”を国際手話で表現した。本年度は本校高等部普通科1年生から3年生まで国際手話講座を実施したため、その活動の中で覚えた手話をオンライン交流で活用する姿がみられた。特に、自己紹介は国際手話でスムーズに行うことができた。

## 5 アンケート調査結果

オンライン交流実施後、Microsoft Forms を使用した選択式及び記述式のアンケート調査を、参加した生徒5名に実施した。選択式の質問は8項目で、それぞれの質問項目について、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5件法で回答を求めた。各質問項目の回答を、「とてもそう思う＝5点」、「そう思う＝4点」、「どちらでもない＝3点」、「そう思わない＝2点」、「全くそう思わない＝1点」として、平均を集計した（Table 7）。

Table 7 アンケート調査結果 (n=5)

質問項目	平均
① オンライン交流の準備やフランス手話の練習時間がもっとほしかった。	4.2
② 交流相手に分かるように工夫できた。	3.8
③ 交流時間（約60分）は短かった。	4.0
④ 今回の交流を通して、外国語でのやり取りに興味をもった。	4.6
⑤ 今回の交流を通して、外国語をもっと学習したいと思った。	4.4
⑥ 今回の交流を通して、フランスという国や文化に興味をもった。	4.8
⑦ 今後も国際交流の機会があれば取り組んでみたい。	4.8
⑧ オンライン交流ではなく、実際にフランスに行って交流したいと感じた。	5.0

アンケート調査の結果、質問⑥～⑧が4.8、5.0と特に高い値となり、本年度のパリ聾学校対面交流とオンライン交流を通して、パリ聾学校やフランスを身近に感じ、フランスや外国に関する興味関心が高まった様子がうかがえた。自由記述の中には、「パリの生徒とか、先生の反応や手話の表示方法会話の流れなど沢山学びになるところがあり

楽しめたと感じた。」「パリでも日本文化があることを知って嬉しくなった。」「日本のことを好きだと言ってくれて嬉しかったです。パリ聾（学校）の文化や歴史を知ることができて学びのひとつとなりました。」という記述がみられた。また、質問④も4.6と高い値となり、オンライン交流を通して外国語でのやり取りに対する興味関心をもつことができたといえる。

## 6 考察

### (1) 対面交流

対面交流で楽しかったことや嬉しかったこととして、手話やジェスチャーなど、生徒自身が活用できるコミュニケーション手段を用いて、パリ聾学校の生徒とのやり取りを楽しんでいたことがうかがえた。また、運動や日本文化を伝える活動についての言及があったものの、コミュニケーション面で意思疎通できた喜び、ジェスチャーや手話の活用に関する内容が目立った。今年度は、工夫点としても挙げられていたように、パリ聾学校の生徒や教員に楽しんでもらえるような日本文化を体感する遊びやことばが通じなくても楽しめるジェスチャーゲームなどの活動を各学年で企画した。過去に行われた活動の例として、令和5年度に実施した共同制作の活動は、共通の目標に向かってパリ聾学校の生徒と意思疎通を図る必要があった。双方の意見を伝え、相手の文化や価値観について理解し、コミュニケーションがより深まることが期待される。

対面交流を通して、相手の言語（フランス語やフランス手話）がわからなくても、ジェスチャーなどでお互いに工夫して伝え合うことで、自分の言いたいことが伝わった、または相手の話を理解することができたという達成感を味わうことで、コミュニケーションへの楽観的な態度につながる可能性があるといえる。英語の授業や English room の話し合い活動では、すべての生徒が理解できるよう Microsoft Teams のチャットや学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」のカード機能を用いて、書いてコミュニケーションを行うことが多い。書くことは、話すことよりも正しさが求

められるようにも感じるのではないかと想像する。そのような生徒にとって、実際に即興でやり取りをする状況となるため、対面交流を通して、思いがなんとか伝わるという経験をするのは大変貴重になると考える。一方で、少数ではあるが、上手く意思疎通が図れなかった場合にはコミュニケーションの難しさを感じたり、より円滑なコミュニケーションのために、国際手話や、アメリカ手話、フランス手話などの手話への学習意欲が湧いたりする生徒もいたのではないかと考えられる。本校の生徒は、パリ聾学校の生徒がフランス手話以外にアメリカ手話や国際手話も使うことを知ること、海外の聴覚障害者との交流のために、外国の手話について学ぶ必要性を感じるのではないかと推察する。また、昨年度の訪問交流や今年度の交流では、アメリカ手話ができる本校の生徒が中心となって、ほかの生徒とパリ聾学校の生徒の会話をつなぐような場面も見られ、学びが促進されるのではないかと考える。パリ聾学校の生徒との交流によって、卒業後も国際的な視点をもって活躍することが期待される。

生徒のアンケート回答より、対面交流で工夫したことについて、コミュニケーション面では、ジェスチャーの活用が最多であったが、翻訳機能の活用も確認された。翻訳機能を活用すれば、日本語からフランス語に変換して伝えることができ、円滑に意思疎通を図ることができる。一方で、主に交流活動の際に英語やフランス語で説明を表示したり、少数だが英語で筆談をしたりしたという生徒もおり、場面や状況に応じて外国語を活用した様子もうかがえた。さらに、写真や動画など意識的に視覚情報を活用して伝える工夫を行った生徒もいたことがわかった。

対面交流の改善点については、活動とコミュニケーションへの省察がみられた。円滑に活動を展開できるように事前に手話を学び、相手に伝わりやすいように説明する必要性を感じていることがわかった。また、コミュニケーションの態度を肯定的に省みる生徒もいたが、一方でより積極的に話しかけにいくべきだったという反省をしている生徒もいた。

今後国際交流で取り組みたい活動内容として、運動、遊び、外出が挙げられた。中でも、互いの国の手話や国際手話をオンラインで学習するという意見や、一緒に外出してツアーに行くという意見があった。また、本校高等部専攻科との交流では、本校の生徒とパリ聾学校の生徒が電車に乗って移動し、班別行動を行うという実践をしていた。体を動かす活動をしたいという希望をもつ生徒もいたことから、スポーツ以外にも、フィールドワーク等の活動も取り入れられるとよいのではないかと考える。

また、コミュニケーションについて、国際手話、アメリカ手話、フランス手話の学習、英語をはじめとする外国語の学習、コミュニケーションへの意欲に関する記述が得られた。本年度は、高等部普通科の生徒を対象に国際手話講座も実施された。今後も継続的に国際手話や外国の手話について学ぶ機会を設けることで、パリ聾学校との交流等でも活用し、より円滑なコミュニケーションを図ることができるのではないかと考える。

## (2) オンライン交流

オンライン交流では、令和5年度は学校紹介動画を作成してパリ聾学校の生徒や教員に視聴してもらい、令和6年度は日本文化に関するプレゼンテーションを行い、それらに基づく質疑応答を通してやり取りをする形をとっていた。本年度の交流では、フランスと日本の教育制度の概要や双方の学校での学習内容等についてプレゼンテーションを行い、質疑応答を行った。生徒は自分自身が学んでいる科目について、海外の生徒にも学習内容が伝わるように生徒自身が知っている英単語で表現したり、翻訳機能を活用して調べたりしながらその場で伝えていた。発表の際、「自立活動」を“independent activity”と表現したが、さらに活動内容について質問されたため、授業で学んでいる内容をまず日本語で考えてから英語を考える様子がみられた。生徒自身が学習内容について再認識し、外国の生徒にも理解してもらえるように説明することの大切さを体験することができたのではないかと考える。

また、「日本の手話」について、「こんにちは」「ありがとう」「かわいい」という手話を紹介した。紹介する手話を選ぶ際、教員と話す中で「ありがとう」という手話の由来の1つに、相撲で力士が賞金を受け取る時の手刀を表すというものがあることを認識した生徒もいた。日本の手話について海外の生徒に説明する機会があることで、生徒自身が使っている日本の手話についての理解も深めることができる可能性がある。今後は、お互いの手話について教え合うような実践もできるとよいと考えられる。

本年度のオンライン交流の反省点として、Microsoft Teams の会議では、書いて提示した英文が反転してしまい、お互いに読み取りに時間を要してしまっただけが挙げられた。チャットは基本的に教員が補助的に使い、各生徒がホワイトボードや紙に書いて伝える形をとったが、生徒がチャットに打ち込んで質問をするなど、より円滑にやり取りをすることができる方法を検討したい。

#### 〔付記〕

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されたものである。

#### 〔参考文献〕

- 澤口真弓・久川浩太郎・藤本裕美子・岡本三郎・大谷典子・伊藤海・鎌田ルリ子(2025)令和6年度フランス国立パリ聾学校(INJS)との交流～オンラインと訪問交流を通じた国際理解の深化～. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 47, 66-71.
- 田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎(2024)令和5年度フランス国立パリ聾学校(INJS)とのオンライン交流～対面型とオンライン型を通して～. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 46, 48-55.